

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：34320
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2011～2014
 課題番号：23520074
 研究課題名(和文) 王権祭式アシュヴァメーダの総合的研究：儀礼・思想・文学を横断する文化現象の解明

研究課題名(英文) Royal Horse Sacrifice (Asvamedha) in Wider Sight: A Study across the Themes (Ritual, Thought, Literature)

研究代表者
 手嶋 英貴 (TESHIMA, Hideki)

京都文教大学・公立大学の部局等・准教授

研究者番号：30388178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：強力な王のみが挙行を許されたアシュヴァメーダ(馬犠牲祭)は、インド史上最も大規模かつ壮麗な祭として知られる。その記述は紀元前以来、ヴェーダやウパニシャッド、叙事詩を始め多くの古典文献に残されており、儀礼のみならず、思想、文学の諸領域にわたる広範な文化的影響が見られる。

しかしその重要性に反して、アシュヴァメーダに関する領域横断的な学術研究はほとんど未着手のままであった。本研究では、上述の三領域を横断する形で緻密な文献調査を推し進め、総合的な視野におけるアシュヴァメーダ研究を行ってきた。これにより、インドの社会・文化への理解を促進する新たな知見を確立することが出来た。

研究成果の概要(英文)：The Asvamedha, royal horse sacrifice, is well known as one of the most large-scaled ritual in the history of India. Its scene was first described in the Rgveda I 162-163 and numerous follower texts in the Veda. Further it has been taken in the story as an important motive in various texts, such as Mhabharata, Ramayana and classical Kavyas. So this ritual has widely influenced the culture and society in India.

In spite of its importance, however, the Asvamedha "in a wider sight" had been investigated very little. Therefore this project aimed to promote a comparative study across three fields, namely ritual, philosophical thought and literature. From this investigation we got significant viewpoints which enable us to understand India's culture and society more deeply than before.

研究分野：印度学

キーワード：インド思想 インド文学 ウパニシャッド 馬 マハーバーラタ ラーマヤナ カーリダーサ

1. 研究開始当初の背景

古代インドの馬犠牲祭「アシュヴァメーダ」(áśvamedha-)は、強大な権力を誇る王が国家的規模で開催するもので、ヴェーダ聖典が伝える諸祭式のうち最も規模が大きく、かつ壮麗な祭として知られている。またその式次第は、多様な儀礼を数多く取り入れている点で「百科全書」的な様相を呈しており、古代インドの祭式文化を知る貴重な手掛かりを提供するものとなっている。他方、インド哲学の源流と目されるウパニシャッド文献では、アシュヴァメーダが特に宇宙生成論と強く結びつけられており、ヴェーダーンタ学派に代表される後代のバラモン哲学との思想的関連が注目される。さらに文学の世界においても、アシュヴァメーダは物語の展開に欠かせない主要モチーフの一つである。叙事詩『マハーバーラタ』や『ラーマヤナ』を始め、詩聖・カーリダーサ作『ラグ・ヴァンシャ』など、アシュヴァメーダの描写を取り入れることでドラマを展開させている文学作品は数多い。このように、王権祭式アシュヴァメーダは儀礼、思想、文学の諸領域を横断する一大文化現象として、インド史上において特に大きな意味を持っている。

ところが、こうした重要性に反して、アシュヴァメーダを主題とする学術研究は未だ少ない。とくに文献学的手法による研究は、白ヤジュルヴェーダに属する三文献のみに基づいたP・E・デュモン(P. E. Dumont, *L'Áśvamedha: Description du sacrifice solennel du cheval dans le culte védique d'après les textes du Yajurveda blanc*, Paris-Louvain 1927)以来、八十年以上途絶えたままであった。その理由は、第一に、アシュヴァメーダという祭式自体が長大であり、しかも他のヴェーダ諸儀礼を組み合わせた複雑な祭式であるため、内容理解に固有の困難が伴うことにあった。また第二に、アシュヴァメーダの内容が文献ごとに大きく異なって伝承されているため、通常の祭式研究で用いられる「統合的記述」(General Description)という手法が適用できないことも理由の一つであった。私は1995年以来、こうした問題を解決し、再びアシュヴァメーダ研究の道を開きたいと考え、新たな研究手法を模索してきた。その結果「時系列的記述」(Chronological Description)というべき手法を採用するに至った。それは、アシュヴァメーダの形態が早い段階から伝承流派ごとに分化・発展したという視点に基づき、文献年代や伝承流派間の交渉関係を精査し、アシュヴァメーダの発展過程に沿って古層から新層までの諸形態を順に示す手法である。この「時系列的記述」による最初の成果は、2008年に公刊した拙著 *Die Entwicklung des vorbereitenden Rituals im Áśvamedha ausgehend von der Darstellung im Vādhūla-Śrauta-Sūtra* であった。ただし、そこではアシュヴァメーダ全体を対象とは

せず、全体のおよそ三分の一にあたる準備祭式のみを検討するに留まっていた。

本研究は、上記の拙著で扱わなかった本祭以降の式次第を含め、アシュヴァメーダの全体にわたり、儀礼の発展過程を明らかにすることを主眼とした。さらに第二の眼目として、ウパニシャッドや叙事詩、美文芸におけるアシュヴァメーダの記述を整理・分析し、儀礼研究の成果と比較することで文化史全体におけるアシュヴァメーダの表象や機能の変遷を解明することを挙げた。これにより、儀礼、思想、文学の各領域を横断する学界初の「総合的アシュヴァメーダ研究」を推進したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の主目標は、上に述べたような総合的なアシュヴァメーダ研究を英文によってまとめ、その公刊に向けて内容及びテキストの練成を進めることである。最終成果となるべき研究書は「儀礼研究」、「思想研究」および「文学研究」という三部構成をとり、概ね次の内容がそこに盛り込まれることになる。

まず「儀礼研究」では、先に挙げた新規の研究手法を用いてアシュヴァメーダ全体の式次第を、現存する関連文献すべてに依拠しながら記述していく。ここでは、祭式で唱えられる呪句や讃歌を収録するサンヒター文献、大まかな式次第とその儀礼的意味合いを解説するブラーフマナ文献、そして祭官が行う細かな所作まで含めた詳細な義軌であるシュラウターストラ文献を主に使用する。そして、各文献に記された挙行方法や意義解説を提示し、同時に文献間に見られる伝承の相違とそれが生じた経緯を考察する。これにより、アシュヴァメーダの儀礼的側面について、学界で最も詳細な記述研究を提供する。

次に「思想研究」では、『シャタパタ・ブラーフマナ』第13章～第14章、および『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』の第1章を中心に、関連諸文献を参照しつつ、アシュヴァメーダの背景をなす宗教思想の解明を行う。アシュヴァメーダは、ヴェーダ祭式発展史のうち比較的遅い段階に成立した祭式であり、年代的にはプラーナ・アグニホートラに代表される極度に簡素化された祭式の登場と、さほど隔たっていないと考えられる。また、ヴェーダーンタやサーンキヤといった後の哲学学派に影響を及ぼす「梵我一如」等の帰一思想も、同時期のバラモン社会に芽生えていたと想像される。本研究では、アシュヴァメーダの思想面に関わる記述を文献に基づいて整理し、さらにこれまで看過されていた「同時期の思想潮流との関係」を考察していく。これは、インド哲学の源泉と目されるヴェーダ祭式思想の発展史について、新たな知見を提示するものとなる見込みである。

最後に「文学研究」では、『マハーバーラタ』のうちユディシティラ王によるアシュヴ

アメーダ挙行を描いた第14巻「アシュヴァメーディカ・パルヴァン」、さらに『ラーマヤナ』やカーリダーサの美文芸作品のうちアシュヴァメーダ挙行にまつわる物語を描いた部分を主に取り上げる。その他の文学作品からも、可能な限りアシュヴァメーダの描写部分を収集し、研究に取り入れる。その上で、文学作品におけるアシュヴァメーダの祭式記述や表象イメージを分析し、ヴェーダ文献の記述との比較を通じて、文学ジャンルにおけるアシュヴァメーダ像がどのように生成発展したかを検討したい。そして研究成果の最後では、儀礼、思想、文学という各部における分析結果を総合し、アシュヴァメーダという文化現象の総体を解明することを目指す。

3. 研究の方法

「儀礼研究」においては、つまりアシュヴァメーダ全体の式次第について、文献学的研究を進める。具体的には、まず一年以上にわたって行われる準備祭式に焦点を当て、前出「1」に挙げた拙著の内容を再検討しつつ、新たな考察を加える。その上で、アシュヴァメーダ本祭から終了までの式次第についても調査を進める。その成果は逐次英文にまとめ、国際学会での発表を経ながら、公刊論稿として洗練させていく。

その一方で、1990年代に南インドで発見された『ヴァードゥーラ・シュラウターストラ』第十一章（アシュヴァメーダ部分）の新校訂テキストを完成させ、研究成果の付帯資料とする。

「思想研究」においては、『シャタパタ・ブラーフマナ』や『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』など、アシュヴァメーダの宗教思想を述べている箇所を主な検討対象とする。具体的論述として、アシュヴァメーダの大規模化や複雑化が引き起こされた背景に、「サルヴァ（一切、完全）」という観念を具現化しようとする思想があったことを、関連諸文献の記述分析から指摘する。つまり、地上の全動物を供犠にし、式次第にほぼ全種のヴェーダ祭式を構成要素として盛り込む、といったアシュヴァメーダの特徴が、この「サルヴァ具現化への希求」という思想傾向に根差していることを明らかにする。

なお、アシュヴァメーダ伝承の形成時期には、「梵我一如」の表現に象徴される帰一思想や、「祭式の内面化（あるいは思念化）」と呼ばれる新たな思考法も発生していたと推測される。本研究では、これらの思想動向とアシュヴァメーダの背景をなす思想との関係にも論及する。こうして「サルヴァ具現化への希求」という思想傾向に着目することにより、上に述べた「儀礼研究」で扱った式次第の発展史を思想面から検討する。また、その検討結果を同時期における思想潮流との関係において位置付ける。

「文学研究」においては、『マハーバータ』、『ラーマヤナ』、カーリダーサの諸作品などを中心に、叙事詩、美文芸およびプラナ文献から幅広くアシュヴァメーダ関連の文献例を集める。それらを相互比較しながら、文学においてアシュヴァメーダがどのようなイメージをもって語られ、またその描写がテキスト生成にいかなる役割を果たしているかを検討する。その検討結果を、先に述べた研究成果、儀礼・思想面での新知見と比較することにより、文学ジャンルにおけるアシュヴァメーダ像の特徴と、その生成過程を考察していく。

具体的な論述として、例えば、文学作品では「罪の清め」、や「子の獲得」といった人間一般の願望がアシュヴァメーダ挙行の動機とされる傾向があり、あくまで王の権威高揚を挙行の効果として述べるヴェーダ文献と異なる点が指摘される。それは、主人公個人の事跡と人間像を描こうとする文学においてこそ生じた、新たなアシュヴァメーダ像であると言える。また、アシュヴァメーダ準備祭式の中で行われる「一年間の馬の放浪」が、文学作品では馬を護衛する王子の冒険譚を語る枠組みとして、物語展開上固有の役割を果たしていることも指摘されよう。これら「文学研究」の成果も、国際学会での公表を経ながら、英文論稿としてまとめていく。

4. 研究成果

「儀礼研究」の主な成果は、アシュヴァメーダが、しばしば他のヴェーダ祭式との関連において拡大発展していった点を明確にしたことである。

例えば、後出「5. 主な発表論文等」のうち〔雑誌論文〕で明らかにしたとおり、火壇積造祭・アグニチャヤナの中で用いられる「マンダラ・イシュタカー」と名づけられた円印付きの煉瓦をめぐる教説が、後にアシュヴァメーダの儀礼伝承が作られる際に大きな影響を与えた。アグニチャヤナの煉瓦に描かれた円は、祭主を外敵から守る「城塞」を意味しており、それを火壇の中心に置くことで祭主が安全に祭式を完遂することが出来ると考えられていた。この教説は後にアシュヴァメーダの中にも取り入れられるが、その時、城塞は煉瓦に描かれた円ではなく、高さ約8メートルの「実物」として火壇上に構築されることとなった。そして、この城塞を巨大な火炉に見立て、多人数の祭官が夜通しそこに供物を投じるといった大規模な儀礼が成立したのである。

同様に、伝承史的に先行する他の祭式の教説を取り入れ、新たな儀礼を発展させた例はいくつも確認されている。後出〔学会発表〕

およびで指摘したように、同じく王権祭式の一種であるラージャスーヤ（即位灌頂式）の諸儀礼が、アシュヴァメーダ固有のコンセプトに沿って採り入れられた。例えば、ラージャスーヤでは王自身が四方から水の

灌頂（アビシェーカ）を受けるが、この儀礼はアシュヴァメーダの中で、祭主の分身である馬に対し四方から水を灌ぐ儀礼（サムクシャナ）へと変容している。後者の儀礼が前者の発展であることはこれまで気づかれておらず、本研究によって初めて明らかにされた点の一つである。

「思想研究」の主な成果は、インド哲学の始源とされるニシャッドの帰一思想が、アシュヴァメーダの祭式思想とも関連しつつ成立した点を明らかにしたことである。

例えば、後出〔雑誌論文〕および〔学会発表〕で論じたとおり、アシュヴァメーダは王権祭式であるとともに、馬を太陽の分身と見立てる点で太陽・祭火への崇拜儀礼であるアグニホートラ（毎日行う祭火への献供）や先述のアグニチャヤナと思想的に近しい位置にある。つまり、アグニホートラ以来の崇拜対象である「太陽・祭火」が、観念連合を通じて多様な事物と同置される傾向があった。その延長線上において、アグニチャヤナでは、火壇がその中心に置かれる祭火とともに太陽と同置される、またアシュヴァメーダでは馬が、天空を駆ける太陽と同置される。そして、後出〔学会発表〕および〔雑誌論文〕で論じたとおり、こうした観念連合の末に、インド思想史上の重要文献である『プリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』の第1章が成立していったのである。

さらにウパニシャッドの成立とほぼ同じ頃には、アシュヴァメーダの発展形であるプルシャメーダ（人間犠牲祭）およびサルヴァメーダ（全生類犠牲祭）といった祭式の伝承が成立する。特に、プルシャメーダではプルシャ讃歌（『リグヴェーダ』10.90）を、そしてサルヴァメーダではヒラニヤガルバ讃歌（同10.121）を、それぞれの中心儀礼で用いることが着目される。両讃歌はともに『リグヴェーダ』の新層部に収録されており、世界の諸事象の起源を歌う点で共通している。こうした両祭式の特徴は、おそらく同時代に影響力を強めつつあったウパニシャッドの帰一思想や、出家放捨（サンニヤーサ）の思想と関連しているだろう。アシュヴァメーダ、プルシャメーダ、サルヴァメーダが出家放捨と関わることは従来ほとんど顧みられなかった。本研究では後出〔雑誌論文〕および〔学会発表〕において関連個所の原文と英訳を挙げながらこの点を解説した。

最後に「文学研究」では、インドの二大叙事詩と称される『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』の双方において、アシュヴァメーダの挙行を主題とするエピソードがどのように成立し、また後続の諸文芸の中でそれがどう発展・変容していったかを明らかにした（後出〔雑誌論文〕、〔学会発表〕、〔雑誌論文〕）。

まず『マハーバーラタ』の第14巻「アシュヴァメーディカ・パルヴァン」では、アシュヴァメーダの祭馬が一年間諸国を自由に放浪するという、実際の儀礼に即したエピ

ソードが挿入されている。そして、この馬を護衛するアルジュナとその配下にある軍団が、馬を追尾する先々で宿敵と出会い、戦闘に身を投じることになる。この「馬の護衛」を枠組みとする物語は、後にカーリダーサの『ラグ・ヴァンシャ』において、英雄ラグとインドラ神との劇的な戦闘シーンへと発展した。さらに後述する「クシャ・ラヴァ説話」（『ラーマヤナ』の一部）では、ラーマの子である双子の兄弟、クシャとラヴァが馬の護衛に戦いを挑んで打ち負かす、というストーリーが形成された。こうしたモチーフの発展史を概観すると、その背景に「有望な後継世代の紹介」という作劇上の大きな意図が窺われる。インドの、とくに英雄物語は、中心的な人物一代の話で完結せず、その父や子など、周辺の世代までを主要人物として組み込んでいるものが多い。例えば『ラグ・ヴァンシャ』ではラグの父であるディリーパがその全盛期においてアシュヴァメーダを挙行するが、その際、王子のラグが大工の困難に耐え馬を護りきること、次代の王を読者に強く印象づけることとなっている。同様の効果は、「馬の護衛」のエピソードを導入している他の諸作品においても生み出されている。アシュヴァメーダは、他のヴェーダ祭式と比べ、格段に文芸モチーフとしての人気を獲得している。それは実際の儀礼が多分にドラマティックであるだけでなく、劇作家の意図を実現する有効なツールとして認められていたことが大きな要因であったろう。

『ラーマヤナ』におけるアシュヴァメーダのモチーフ化に関する研究では、従来見過ごされてきた重要な事実を明らかにすることが出来た。主人公ラーマの双子の息子、クシャとラヴァは、『ラーマヤナ』や『ラグ・ヴァンシャ』といった早い時期の作品では、馬の護衛と戦うことはない。むしろその主要な役割は、育ての親であるヴァールミーキから『ラーマヤナ』の吟唱を教え込まれ、父ラーマがアシュヴァメーダを行っているときに、本人の前でそれを歌い上げるという点にある。『ラーマヤナ』の中に『ラーマヤナ』自体の創作現場が描かれ、主人公自身の前でそれが初上演されるという筋立てにおいて、重要な一部を担っているのである。

本研究では、このクシャ・ラヴァ兄弟が持つ吟遊詩人としての性格付けが、アシュヴァメーダにおける実際の儀礼を下敷きに形成されたことを指摘した（後出〔学会発表〕）。アシュヴァメーダでは、その挙行期間を通じて、二人の歌い手がリュートを弾きながら祭主である王の事績を歌い上げる、ということが定められている。その祭式規定と照合してみると、クシャ・ラヴァの兄弟には多くの一致点が見出される。二人という人数、リュートを伴った弾き語りをする点、王の事績を内容とする歌を歌う点、さらにアシュヴァメーダの祭場で祭官・祭主の前で歌うといった点

以上に紹介した様々な研究成果を総合的に見た時、アシュヴァメーダという祭式が、インドの文化・社会においてきわめて多様な意味を担ってきたことが分かる。世界を見渡しても、一つの祭式が儀礼、思想、文学といった複数の領域でこのように大きなプレゼンスを持った例は少ないと言える。さらに、今回の研究課題では扱わなかった領域であるが、インドの経済史におけるアシュヴァメーダの意義も決して小さくない。とくに貨幣史ではアシュヴァメーダ・コインと呼ばれる硬貨群が一大ジャンルを形成している。インド史を通じて、為政者のステイタスを顕示する手法の一つとして、アシュヴァメーダの挙行があり、その記憶がコインの図柄として民衆の間に流通していたのである。今後の大きな課題の一つは、こうした文献以外の歴史資料に基づくアシュヴァメーダ研究の開拓にあるといえよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

Hideki TESHIMA, Dakṣiṇā at the Aśvamedha as Described in the Mahābhārata: Its Ritualistic Features Revealed in Comparison with the Vedic Texts. *Journal of Indian and Buddhist Studies*(『印度学仏教学研究』英文論文集), 62(3) 1072=(8)-1080=(16), 2014, 査読有.

手嶋 英貴, アシュヴァメーダの馬をめぐる祭式学的思考の展開 祭式における「理念と現実の隔たり」をどう埋めるか . 『インド論理学研究』, 5 301-320, 2012, 査読なし.

Hideki TESHIMA, Mythological Background of the "Fort of the Gods" Built at the Aśvamedha Prescribed in the Old Śrauta-Sūtras of the Taittirīya School. *Journal of Indological Studies* 22&23 87-96, 2011, 査読有.

[学会発表](計9件)

Hieki TESHIMA, The Origin and Growth of a "Horse as the World": Textual Sources of Brhadāranyaka-Upaniṣad 1.1. 16th World Sanskrit Conference, 28.06.2015, Bangkok (Thailand).

手嶋 英貴, アシュヴァメーダの犠牲獣リスト形成史. 第4回ヴェーダ文献研究会, 2015年3月22日, 大阪大学(大阪府・大阪市).

手嶋 英貴, Brhadāranyaka-Upaniṣad 1.1 成

立史 一祭式学から哲学的思考への変遷をたどる . 日本印度学仏教学会第65回学術大会, 2014年8月31日, 武蔵野大学(東京都).

Hieki TESHIMA, The Evolution of the Kuśa-Lava Episode: Its Origin, and Variations in the Epic and Post-Epic Texts. 7th Dubrovnik International Conference on the Sanskrit Epics and Purāṇas, 13.08.2015, The Inter-University Centre, Dubrovnik (Croatia).

手嶋 英貴, プラーフマナの中でシュラウタストラより遅れて成立した部分 アシュヴァメーダ関連箇所より . 第2回ヴェーダ文献研究会, 2014年6月1日, TKP ガーデンシティ京都(京都府・京都市).

Hideki TESHIMA, Aspects regarding the Horse Guards in the Aśvamedha: Revealed through Comparison with the Rājasūya. 6th International Vedic Workshop, 06.01.2014, Kozhikode (India).

手嶋 英貴, 叙事詩の中のアシュヴァメーダ ヴェーダとの比較から見えてくる祭式学的特徴 . 日本印度学仏教学会第64回学術大会, 2013年9月1日, 島根県民会館(島根県・松江市).

Hideki TESHIMA, Promotion System of Sacrificer's Status in the Vedic Kingship Rituals: Comparison of the Rājasūya and the Aśvamedha. The International Symposium in Kyoto "Consecration, Initiation, and Coronation Rituals in Ancient and Medieval India," 2012年12月20日, 京都大学(京都府・京都市).

手嶋 英貴, 馬の放浪をめぐる表象と実際 アシュヴァメーダの馬は一年間放浪するか . 日本印度学仏教学会第63回学術大会, 2012年6月30日, 鶴見大学(神奈川県・横浜市).

[図書](計0件)

[産業財産権]
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]
ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

手嶋 英貴 (TESHIMA, Hideki)
京都文教大学・総合社会学部・准教授
研究者番号：30388178

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし